

フォト・ジャーナリスト とは? —撮れなかった1枚の写真—

吉田ルイ子

岩波ブックレット NO.100



フォト・ジャーナリストとは？

—撮れなかった1枚の写真—

吉田ルイ子

撮れなかった1枚の写真

フォト・ジャーナリストという肩書

写真とコミュニケーション

戦争とフォト・ジャーナリズム

写真週刊誌とフォト・ジャーナリズム

おわりに—フォト・ジャーナリストの資格

本文写真＝吉田ルイ子

岩波ブックレット No. 100

撮れなかった1枚の写真

写真においていちばんむずかしいことは、見ることを学ぶことである。

ほかのすべては、それとくらべれば簡単である。

——アルフレッド・ステイイーグリッツ

一九七四年一二月、私は、ハノイからサイゴン（現ホーチミン市）まで、ベトナムを縦断して走る国道一号線に立っていた。

戦火はすでにサイゴン郊外まで拡がり、国道にも、周囲の水田の小路にも、なべ、かま、やかん等を手に、子どもを背中と両脇にかかえながら、北部から避難してくる人びとがあふれていた。一二月といっても、ここ南の国の冬は暑い。あまり汗をかかない私だが、首のまわりとカメラを握る掌は、じっとり汗ばんでいる。逃げまわるベトナムの人びとの衣服も、汗と泥と血でべっ

とり濡^ぬれている。

お盆のように大きな紅い夕陽^{ゆうひ}が、メコン川の向うに沈もうとしていた。私は人びとの群れの中に、一組の母と子の姿をみつけた。大きな木の下に、片ひざをたててしゃがみこんだ母親のひざの上に、すやすや眠る赤ん坊、竹の笠帽を枕に、母親のひざ元でうつ伏せになっている子ども、荷物は竹かごひとつとヤカンひとつ、母親の乱れた髪、やせこけた頬、思いつめた表情と、平和そのものの表情で眠っている赤ちゃんとの対比が、夕陽の逆光に照らし出され、真赤な空に浮き出されたシルエットとなって、戦火の喧噪の中に、ドガの描き出す祈りにも似た、しずかな安らぎを感じた私は、*「絵になるー」*という映像人間特有の直観で、シャッターに手をかけた。と、その瞬間、母親は赤ん坊の顔を手でおおい、もう一方の手をうつ伏せの子どもの頭におき、自分もレンズから顔をそむけた。二〇〇ミリの望遠レンズをつけた私のカメラのファインダーの中には、手でおおわれた指の間に、おできだらけの子どもの頭と、赤ん坊の柔らかな肌にくっきりのかされた傷のあと、ひきつった母親の首筋があった。

シャッターの上にのせた私の指は、とうとうそのままそこに膠着^{こうちやく}してしまった。シャッターを押すことができなかった。冷や汗が首筋から胸元へどつと流れた。

撮りたかったのに撮れなかった、この一枚の写真について、私は、いまだから白状するが、日本へ帰るまで数カ月、プロのフォト・ジャーナリストとしての呵責^{かしやく}に悩まされた。きつと、ピュ

「リッツアー賞がもらえるほどの傑作だったにちがいない。その瞬間をのがした私は、プロではない。写真をはじめて未だ数年しか経っていなかった私だったが、ああやっぱり私はプロにはなれない？」と自分を責めた。

この話を日本に帰ってから、プロ写真家仲間になると、ある人は、「俺なら、手でかくしたその瞬間を撮すな」といい、ある人は、「近づいてかくした手をとってもらおうたのむな」とも言った。

その後、私は考えた。というより、感じた。あの写真は撮らなくてよかったのだ、あの状況と事実を見た、ことで充分だった。否、見せられたことを重要なことだったのだ、と感じた。そして、いまでもそう信じている。

レンズから顔をそらした母親のひきつった首筋は、「どうか、写真を撮らないでください。おできだらけの子ども、傷だらけの赤ん坊、私たちは戦争から逃げることに疲れきっているのです。そっとしておいてください」という必死の抵抗を表現していたのだ。その瞬間の反応を無視してまで、いわゆる絵になる傑作を撮って何になるう。まして、たとえ賞をもらったところで、私は一生いやな気持がのこったにちがいない。

写真は被写体の協力、そして、撮る側と、撮られる側のコミュニケーション、しかもポジティ

ブなバイブレーションとコミュニケーションが無くては撮れない、撮るべきではない。これを、私は写真の原点にしたい。被写体への思いやりとやさしさ、それは自分自身を大切にすることでもあると思う。

たしかに、プロとしてのきびしさに限界があるといわれるかもしれない。私はそれでもいい。プロのフォト・ジャーナリストである前に、私はひとりのふつうの人間でありたい。

フォト・ジャーナリストという肩書

大学卒業後、某放送局のアナウンサーだった私が、'60年代前半、留学生として米国に渡って以来、一〇年の歳月をニューヨークを中心とする米国で過ごし、日本に帰り、その直後、全米最大の規模の黒人スラム街といわれるハーレムの写真展を開いた。'60年代に盛り上がった黒人公民権運動は、若者のベトナム反戦運動や、ウーマン・リブ運動等とともに、'60年代の米国の価値観を、根底から大きくゆり動かしていた。

移民雑種国の国是をもつ米国、そして米国民にとって、'60年代、'70年代前半は、まさに *Idea* 追求「自分はなにものか」の時代だった。アメリカン・インディアンをはじめとする黒人、メキシコ系、東南アジア系等の少数民族が、米国民としての権利と、自分たちの民族の文化を主張した時代だった。

そうした時代背景の米国で、一アジア系の留学生だった私は、黒人系が圧倒的に多いハーレムに住み、二級市民ニグロから、美しいブラックへの自覚と誇りにめざめていくハーレムの黒人た

ちの姿を撮りつづけた。私の写真は、ニグロは怠け者、汚い、ハーレムはこわい、という偏った情報しか与えられていなかった日本人のびとに、驚きと一種のカルチュア・ショックを与えたい。私としては、見たまま、あるがままのハーレムの人びとの姿を撮したまでなのだが、その反応は、私の想像をはるかに超えて大きかった。

マスコミが私に、インタヴューや原稿や写真提供を依頼してきた。

その時、かならずきまって、彼らは、私に、「肩書を何としましょうか？」ときくのだった。次に彼らは、「どの組織に所属しているか」ときいた。

一〇年留守にした日本へ帰ってきた当時、最初に私が戸惑ったのも、この、どこに属する、どんな肩書の人間か？を問われることだった。どこかに電話をかける。すると相手の交換手は、「どちらの吉田さんですか？」ときく。相手はこの場合、「朝日新聞の……」とか「NHKの……」とか、所属する会社名の答えを期待している。つぎに、「〇〇課長」とか「〇〇部長」とかの肩書を期待している。

ところが、私には、所属会社も、肩書となる役職もない。というわけで、「世田谷の吉田ルイ子です」と住所を告げるしかない。会社名も肩書名もないことが、これほど肩身のせまいことか、ということをも骨身に沁みて感じた帰国当初だった。

肩書をもたなかった私は、社会派カメラマンはまだしも、黒人問題研究家とか、アメリカ女性

評論家とか、女流写真家とか、じつにさまざまな肩書をつけられた。

カメラマンということばは、もともと映画等動く映像を撮る人をよぶ時の名称である。それと、私は、少くともマン(男)ではない、かといって、女流という表現は差別的で好きではない。男流写真家ということばはないではないか。男流作家しかり。

そこで私は、仕方なく自分に、フォト・ジャーナリストという肩書をつけてもらうことにした。アナウンサーとして留学した私は、滞米中に、自分を表現する手段を、マイクからカメラに置きかえたただけだ。

もともとしゃべるのが下手な私は、アナウンサーより放送記者かディレクターになりたかった。留学する目的として、放送ジャーナリズムを専攻した。しかし、当然なことだが、英語で生まれ、英語で育ち、ふつうの人の数倍も話す才能に恵まれた放送ジャーナリズム専攻の米国の大学院生たちと互角につきあっていたのは、苦しかった。そして、いつも教室中に反響している弾丸のようなタイプライターの音……。私は英語ノイローゼになった。口がまったくきけなくなった。

そのころ、私は、ニューヨークの近代美術館で、「我らみな家族」The Family of Man フォンール写真展を観た。日本で見逃がしていたので、軽い気持で出かけた。まったく写真についての知識も関心もなかったが、小さいころからパステル画が好きだった私は、いところからもらったボックスピンホールカメラで、風景や花や子どもを撮って、のちに画にするときに光線の具合を記

録しておくために、写真を撮ったことがあるていどだった。

ところが、会場に展示された世界中の人間模様を世界中の人たちが撮ったフアマミリー・オブ・マンの写真の群像の中に、私はどっぷり浸って、酔ってしまった自分を発見した。とくに、米国深南部の黒人の産婆さんが、赤子を取りあげている一枚の写真、赤子の羊水ようすいが窓からの逆光に光り、ガタピシの小さな木の窓から、すすけたガラスに丸い鼻を押しつけて、じっと弟か妹の誕生の瞬間を見守る二人の黒人の子どもたち……。この一枚の写真の前に、私は釘づけにされてしまった。

一つの生命の誕生の瞬間、この決定的瞬間の荘厳さと喜びを、これほどまで鮮明にたった一枚の写真で表現しつくしていることに、信じられないほどの衝撃をおぼえたのだった。小説でもない、絵画でもない、彫刻でもない、また動く映画でもない、たった一枚の写真こそが、人間の一生の中でもっとも重要な瞬間のドラマを、表現できるのだ。

ほとんど直観ともいえる本能的衝動にかられた私は、この時、「写真をやろう！」と決心したのだった。そしてこんなすばらしい写真を撮った人は誰だろう、とタイトルに目を通すと、ユージン・スミス Eugene Smith という活字が刻まれていた。じつは、当時の私は、スミス氏が、ライフの高名な写真家であることも知らなかった。ユージン・スミス氏に会ったのは、その後数年経ってからだが、彼の名は、あの感動的な写真とともに、私の脳裏に深く刻まれることになった。

写真展にいったつぎの日、私は、学部長に会いにいき、専攻を、放送ジャーナリズムから、フォト・ジャーナリズムに変えたいと申し出た。

その理由として、三つを挙げた。

放送ジャーナリズムを専攻するには、私の英語学力に限界を感じたこと、二番目に、私はやがてジャーナリストとして、米国だけでなく、アジア、中東、アフリカにいきたい、そのためにも、ことばには国境があるが映像にはない。写真は全世界で通じるユニバーサルなことばであること。そしてもっとも大切なのは、私は現在ハーレムに住んでいる。公民権運動が盛りあがりつつあるいま、ハーレムの人びとの生活を通じて、彼らの意識の変化を写真に撮ってみたいということ。

じつは、この三番目は、私自身にとっても、大きな賭けだった。自信があったわけではない。否、まったくなかった。ただ言えることは、ハーレムに住みはじめたころ、まだ学校へ行かない小さな子どもたちの、つやつや光る黒い肌、輝く瞳、おいしそうなプクンと厚い唇、最高に白い美しい歯と美しい笑顔、こんなすばらしい芸術品の光りを表現できるのは、光を書く photograph 写真しかできないということだ。

しかし、彼らが学校へいくようになり、やがて社会へ出ていく年頃になると、子どもたちの顔や身体から光りが消えていく、そしてやがて、仕事がない、金がない、希望がない、と朝っぱらから酒浸りになっていく大人の男たち、一方、大勢の子どもをかかえ、生活を支えるために、家

庭でも外でも働きづめのお母さんたち、しかし、子どもたちの唯一の支えである彼女たちは、生活の苦しみやつらさを、豪快な笑いと立派なおしりでふきとばしてしまふ力づよさ、したたかさ、私は、ハーレムの人びとのありのままの姿、生活を記録したい、じょじょに盛りあがりつつある公民権運動の波の中で、きつといつかは変ってゆくだろう。しかし、いまのハーレムがいつか歴史のひとこまにつながるにちがいない、という思いが私の中でふくれあがってきつつあった。

私の希望を、忍耐づよくきいていた学部長は、私の転科に許可を与えてくださった。

「ところで、あなたは、カメラを持っていますか？」

と彼が最後にきいた。

「いいえ。」

「そう、じゃ、学部にあるカメラと暗室を使いなさい。」

かくして、私は、コロンビア大学ジャーナリズム科大学院の放送ジャーナリズムから、フォト・ジャーナリズム専攻に転科したのである。そして二年後、私は、ジャーナリズムの修士(MA)を修得した。

その後、生計のために、私は広告会社の写真部に働くことになったが、五時に会社がひけるといつも、ハーレムに通いつづけ、住んでいた頃の友だちと夜を過ごすのだった。そして、いつか、ライフやルックに載るような、いい写真を撮りたいと思いつづけていた。

私は基本的に、ジャーナリストでありたいと思っていた。ジャーナリズムの中で、ある人はペンを、ある人はマイクを、ある人はテレビを、ある人はカメラを手段とするちがいがいこそあれ、ジャーナリストであることに於いて共通したマスメディアの人間に変わりはない。

というわけで、帰国後、私は自分を、フォト・ジャーナリストと名のすることに決めたのだった。私の尊敬する、ユージン・スミス氏が、自らを *journalistic photographer* ジャーナリストイックな写真家、といわれていることに、少しでも近づきたいと思ったからでもある。

しかし、名のつた以上、そのことばの大きさに、いまだに圧倒されている今日である。フォト・ジャーナリズムとは何か？ 未だ微力な私には、人に説明したり、説得する力はない。自身、模索をつづけている。

とくに、日本において、このことばは、理解されにくい。肩書ときかれて、フォト・ジャーナリストというと、「えっ、何ですって？」と問い直される毎日である。

数年前から、私は納税申告書の職業欄に、フォト・ジャーナリストと書いているが、税務署の役人には、未だに何のことかわかってもらえない。しかし、最近、若い人びとの間で、フォト・ジャーナリストと自らを名乗る人びとが少しずつ出てきたことを、私は心づくろい思っている。

もっとも、大切なのは、肩書より、中味である。私自身の二〇年にわたる経験から、フォト・ジャーナリズムが今日かかえる問題を、みなさんといっしょに考えていきたいと思う。



ハーレムの中心にあるマウント・モリス公園で 1969年



マルコムXの葬儀—ハーレム・1968年





ハーレムの少年 1969年

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com